

人間の労働の経済学的考察 (四)

山本二三丸

はしがき

一 人間の労働の基本的意味

.....(以上、第十四卷第四号所載)

二 本来的私的所有のもとでの人間の労働

- (1) 本来的私的所有の意味
- (2) 社会的富の規定

(→)

(⇐)

(⇒)

(3) 商品生産における労働の二面性

.....(以上、第十五卷第三号所載)

(4) 私的労働の社会的性格

.....(以上、第十五卷第四号所載)

(5) 労働の対象化

.....(以下、次号所載予定)

(6) 価値法則

(7) 所有法則 (交換の法則)

(8) 価値の自立化

(9) 発展法則

三 人間の労働力の商品化

人間の労働の経済学的考察 (四)

- 四 資本制的私的所有のもとでの人間的労働
- 五 社会的所有のもとでの人間的労働

二 本来的私的所有のもとでの人間的労働

(3) 商品生産における労働の二面性

(→)

さきに本稿第一章〔5〕労働の二面性⁽¹⁶⁾で、あきらかにされたように、人間的労働は、つねにかならず、その一面においては人間労働力一般の支出として抽象的労働であり、それと同時に他の一面においてはその規定された・特定の有用的形態における支出として具体的労働でなければならない。人間的労働の結果である労働生産物がそのまま労働力の担い手自身の欲求をみたすものとしてかれ自身の手で直接に消費されようと、あるいはまた、それが商品として交換に供されようと、その労働生産物をつくりだす労働そのものがつねにこの二面性を有するものであることに変わりはない。だが、その労働が、労働生産物そのものについてどのような意味をもつかということになると、右の二つの場合、すなわち、自足的生産と商品生産とのあいだには、本質的なちがいが生ずるのである。

(16) 本誌第十四巻第四号(三十六年二月)、一七ページ以下。

(17) ここで「自足的生産」と呼ばれるものは、いうまでもなく、たんに自給自足の独立生産者ばかりではなく、また原始共同体、奴隸制および農奴制のもとにおける封鎖的な現物経済をもふくむものである。

まず自足的生産のばあいには、特定の形態を規定された・具体的労働によって生産物そのものの上に特定の有用的効果がもたらされ、それによって生産物は人間にとっての特定の有用的属性をあたえられる。つまり、具体的労働によって、生産物の使用価値が作りだされる。では、抽象的労働はどうかといえ、抽象的労働はこのばあいには、人間の労働一般の支出が一定量だけおこなわれ、たとえば平均的質の八労働時間（一労働日）のうち、五労働時間が米の生産に支出されたとすれば、この五労働時間の支出は、労働力の担い手がその労働力を支出するさいに当然に考慮の中にいれておくべきことではあっても、しかし、それによって作りだされた生産物そのものは、ただ、その生産者にとって五労働時間を要費したというだけであって、すでにその支出がおわっているかぎり、その生産物にとっては過去に支出された労働はもはやなんらの意味をももちえない。これは、ただ生産者そのものにとっての問題であって、同じ生産物の生産および再生産にさいして、総労働時間の配分を規定するひとつの要素として、生産者の考慮にいれられなければならない事柄である。

ところが、商品生産のばあいには、具体的労働によって生産物の使用価値が作りだされる点は右とかわりないが、抽象的労働については、その一定量の支出が生産物そのものの価値の大きさを規定するものとなる。それは、たんに生産者にとって要費したものであることではなくして、いまや、生産物そのものの交換価値の大きさを規定するもの、すなわち——より厳密にいうならば——商品価値の大きさを決定するものとなるのである。

それゆえ、本来は社会存続の条件である必要生産物をつくりだす労働、すなわち使用価値を生みだす有用的労働、いいかえれば具体的労働が生産的労働の内容を成していたものであるが、いまや商品生産のもとでは、具体的労働という一面において使用価値をつくりだすと同時に、抽象的人間的労働という他の一面において商品価値を形成するも

のが、ただこの二面をもつ労働のみが、まさしく生産的労働となる。使用価値をつくりだす具体的有用的労働は、どの社会においても、その社会的形態のいかんにかかわらず、人間がおこなうべきものであり、人間と自然とのあいだの質料変換、すなわち人間の生活を媒介するための永久的な自然必然事であるがゆえに、具体的有用的労働という一面は、すべての社会における生産的労働に共通したものであり、むしろこれらすべての生産的労働にとってひとつの「基底」を成しているものであって、この「基底」の上に、それとならんでそれぞれの社会での生産的労働の社会的特質が成り立っているものとみることができ、このような観点に立つならば、商品生産社会における生産的労働の特質は、まさに、抽象的労働という一面において商品価値をつくりだすものという点に求められなければならないであろう。

(二)

それゆえ、商品生産における労働は、右のような二面性をもつものではあるが、しかし当の私的生産者にとって、その労働生産物の交換価値の大きさだけが決定的な意味をもつものであって、その商品の使用価値が問題となりうるのは、その交換価値の大きさに影響をおよぼし、これを制約するかぎりにおいてのみであるということ、——このことはいままさらいうまでもないところである。だが、このことは、当の私的生産者そのひとが、価値をつくりだす抽象的労働と使用価値をつくりだす具体的労働とはっきり区別して両者をとらえることができ、それによって前者の抽象的労働だけを積極的におしすすめ、他方後者の労働についてはきわめて消極的になる（「消極化」）のだということの意味するものではけっしてない。行論においてさらに論究がおこなわれるはずであるが、右の他人のための使用価値をつくりだす具体的労働はある程度感知することができるというものの、抽象的労働については、

これをとらえることなどとうていむづかしい上に、それが商品の交換価値——実は、商品価値——の実体であるという事など、全然わかりようはない。むしろ、その反対に、商品の使用価値、すなわちその効用が交換価値と密接な関係をもっていて、効用こそ商品の交換価値の大きさを決定する唯一の基準であるときえ、思いこむのである。そこで、かれらは、どのようにして有効適切な使用価値をつくりだすか、そして、それによって商品にたいする需要を大いに喚起してその交換価値を高めることができるか、ということにその注意を集中するという事にならざるをえない。それゆえ、労働生産物が「商品」となるにしたがって「使用価値をつくる労働」が「消極化」するという事をもつてきて、資本主義社会の「抽象的な商品」と資本主義以前の「単純なる商品」とを「区別」しようとする宇野氏のつぎにみられるような論法は、ただたんに事実そのものについてすらも、すこぶる問題のあるところといわなければならない。

「……資本にとつては勿論如何なる種類の産業、生産面にそれが投ぜられるかには、何等それ自体の興味はないわけであるが、直接の生産者たる労働者にとつても、原則としては如何なる生産に従事するかに関心を持ち得ないものとなって来る。極言すれば『労働需要の方向の変化に従って、人間労働の一定部分が、或時は、裁縫の形で、又或る時は機械の形で供給せられる』『資本論』、インスティトゥット版第一巻、四八ページ——山本」といったものになるのである。資本にとつても労働者にとつても、労働の内容——使用価値をつくる労働そのものには直接興味を持ち得ないことになる。

商品の使用価値が他人の為めの使用価値、云い換えれば価値の担い手としての使用価値に過ぎないということは、先きにも指摘したように商品の生産者にとつては、使用価値をつくるものとしての労働が、己に価値をつくるもの

としての労働の他の消極的一面に過ぎないものとなるのであって、之を具体的に実現する迄には、生産自身が商品生産としての発展を遂げなければならない。そしてそれは単純なる商品生産に於いては到底実現せられない。自家消費を目的とする部分を残して居る限り、使用価値をつくる労働の消極化は阻止せられる。又中世紀的職業的分業の如くに一面商品生産的に著しく発達したとしても、なお生産条件自身に於いて斯かる消極化を許さないものが有力に作用するのである。

資本が生産手段を直接の生産者から収奪したとき、生活資料自身までが商品化すると共に労働の二重性は、最早や一体をなした生産的労働の単なる二面としてではなく、価値をつくる労働が積極的一面となり、使用価値をつくる労働がその消極的一面をなすものとならざるを得ない。そしてそれは単に概念的に斯くの如くに分析して考えられるというのではなく、具体的に斯かる二重化を可能にする物質的条件をもつくり出すのである。労働の機械化、無内容化、量化としての一面は資本主義的生産方法を独自のものとして確立する機械的大工業を基礎にして始めて実現せられるのである」(宇野氏著『価値論』、一一〇—一一二ページ、傍点およびゴシック体——山本)。

ごらんのように、ここにはこの論者特有の論理的ならびに国語的操作があますところなく適用されているので、その客観的内容を正確に判断するために、そのうちの主要な問題点をとりだして、これについてたらいった検討を加えてみることにしよう。

イ まず、この論者が、「資本にとって労働者にとっても、労働の内容——使用価値をつくる労働そのものには直接興味を持ち得ないことになる」と主張しているのは、二重、三重の意味においてまったくまちがったものである。なぜ、それは二重、三重の意味でまったくまちがったものだと云うのか？

なぜならば、第一に、労働そのものが「資本にとって」有する意味と、それが「労働者にとって」有する意味とは、まったく異なっているからである。「資本にとっては勿論如何なる種類の産業、生産面にそれが投ぜられるかには、何等それ自体の興味はないわけである」のは、ひとえに、資本そのものが、どこからであろうとただそこから一定率以上の利潤をひきだすことだけをその主たる目的としており唯一の決定的動機としているからである。つまり、資本にとっては、「一定率以上の利潤が得られさえすれば、どこであろうとかまわない」ということであつて、そこには、資本にふさわしい一定の条件がちゃんといっているのである、だが、これにひきかえて、労働者が「如何なる生産に従事するかに関心を持ち得ないものになつて来る」のは、そもそも労働者そのひとにとっては、かれ自身の労働力商品ができるだけ有利な条件で買手に売ることだけが問題であつて、その販売する労働力商品がどこで、どのように消費されるかということについては、はじめから選択などできる立場におかれていないからである。つまり、資本の手によって「自分の皮をなめし皮にされること以外になにも期待できない」労働者にとって「使用価値をつくる労働」などは、興味をもちたくとももちようがないのである。だから、この両者を一緒くたにして、「資本にとつても労働者にとつても……直接興味を持ち得ないことになる」などと主張するのは、両者における根本的差異を糊塗して厳密な概念規定をアイマイな形容句で混乱させるタワ言といわざるをえない。

第二に、できるだけ大きな価値増殖を追及するのが資本の本性であるからと云つて、資本が「使用価値をつくる労働そのものには直接興味を持ち得ない」だとか、あるいはその反対に、資本は「価値をつくる労働」だけに直接興味をもつものだ、などということが、はたして、断定されうるであろうか？　ここには、あきらかにひとつの論理的すりかえがあるようである。まず第一に、「価値をつくる労働」などというものは、眼に見えるものでもなければ手につか

まえることができるものでもなく、資本にとっても労働者にとっても、——はたまた、私的生産者にとってさえ——直接関知しようもないものである。第二に、これに反して、「使用価値をつくる労働」は、眼に見え手にとらえることができるものであり、労働者はその労働力を支出するさいにやおうなしに直接関心をもたざるをえないし、資本は資本で、その価値増殖を唯一の目的とするかぎり、とりわけその「一定率以上の利潤が得られる」という条件との関連において、「いかる種類の産業、生産部面」でどのように「使用価値をつくる労働」がおこなわれるかということに重大な関心をもたざるをえない。というのは、それが「一定率以上の利潤」を得られるかどうかということとは、その特定の使用価値をもつ労働生産物にたいする社会的な需要供給の関係によって決定的に左右されるからである。

このばあい、資本は、その獲得する「一定率以上の利潤」をば、その労働生産物の使用価値——効用——にたいする社会的需要の関係から引き出すことができたのだとさえ、考えるのである。資本がこうした考え方にどんなに執著するかということとは、「単に概念的に斯くの如く」なっているというだけでなく、「具体的に」事実そうなっているのかあって、このことは、今日でも依然として種々様々の限界効用説が——資本の利益において——製造され、ひろく流布されているという事態をみても、思い知られるところである。それゆえ、資本が「使用価値をつくる労働そのものに直接興味を持ち得ないことになる」などという断定は、直接事実を歪曲するだけのものである。「概念的に」も「具体的に」も、事實はまさにその反対で、資本はとうてい捕捉しがたい「価値をつくる労働」よりは、むしろ眼にみえる効用をつくりだす「使用価値をつくる労働」にこそ直接重大な関心をもたざるをえないのである。

□ つぎに見のがすことのできないのは、この論者が、資本なり労働者なりが「使用価値をつくる労働」に「直接興味をもつかもたないか」という、主観的関心の度合の問題を、そのまま、「使用価値をつくる労働」の面の「消極

化」という客観的、事実の問題にすりかえて、いる点である。問題は、商品に対象化する労働——すなわち、「価値をつくる労働」と「使用価値をつくる労働」——の客観的意義がどうであるかということであって、この問題にたいする正しい答えは、商品そのものに対象化した形において、——つまり、商品そのものの価値および使用価値として、——その社会的、客観的意義をあきらかにすることによってのみ得られるものである。この場合、労働力を支出する当の労働者や、さてはこれを雇用する資本家が、その両面の労働について「直接興味をもつかもたないか」などということとあれこれ論じたところで、いったい、なんの足しになるうか？ しかも、この見当はづれの「主観的関心の度合」なるものをもってきて、もしそれが低ければ「使用価値をつくる労働」そのものは「消極的」なものである、その「消極化」が実現しているなどと『結論』づけるのは、あきらかに見えすいた論理的ペテンでしかない。

八　ところで、この論者がどんなに論理的錯乱におちいつているかということ——これは、その裏から見れば、どんなに論理的不貫性がこの論者自身によって利用されているか、ということである——は、右のような「主観的関心の度合」の問題をば、資本家や労働者については不当にはなだしく強調しておきながら、独立生産者や手工業者については、これをまったくおしくしくしてしまっている、という点にこの上もなくよく示されている。そもそも問題となっているのが商品を生産する労働の二面性であって、たんなる労働生産物あるいは自家消費用の生産物を生産する労働などが問題となっているものではないということは、はじめからわかりきっていることである。いったい、独立生産者が商品を生産するばあいと、資本家と労働者とが商品を生産するばあいとで、商品を生産する労働そのものについての当事者の「関心」がまったく異なったものとなってくるであろうか？！ もし、資本家が「価値をつくる労働」に「関心」をもつと云うならば、当然に、同じく商品を生産する者として独立生産者も「価値をつくる労働」に

同じく「関心」をもたねばならぬ。

もし、この論者が、万が一——ということとは、この論者がしばしば意識的に混同をあえてして読者の目をくらましていているという事実をいちおう見ないとして、ということである——「自家消費を目的とする部分を残して居る限り」という論者自身の言葉にあるように、(1)自家消費用の生産物をつくる労働について、あるいはまた、(2)この独立生産者の全労働が商品生産と自家消費生産との両部分から成っていることについて、右のように「価値をつくる労働」と「使用価値をつくる労働」との「積極化」「消極化」を論じているのだとしても、この論者の主張するところが完全な論理的錯乱と迷妄とを示しているだけのものだけのことではうたがない。なぜならば、(1)の場合については、そもそもから「価値をつくる労働」はまったく存在することなく、したがってこれとの関係において「使用価値をつくる労働」の「消極化」ということなど、およそ問題となりえないからであり、また、(2)の場合については、その独立生産者の労働全体がまだ商品生産の労働となつておらず、したがって「価値をつくる労働」がそのすべてを占めることになっていないということだけのことであつて、「使用価値をつくる労働」そのものの「消極化」とか「積極化」とかは全然問題となりえないからである。この(2)のばあい、右の独立生産者の労働全体のうち、その全部が「使用価値をつくる労働」としての一面をもっているが、「価値をつくる労働」の一面をあわせもっている労働はその一部分にすぎない。したがって、「使用価値をつくる労働」はその全部であつてその「消極化は阻止せられる」などと主張するとしたならば、これほど見当はずれのタワ言はないであらう。

ここでこの論者が「消極化は阻止せられる」などという、もっともらしい表現をこらしているのは、かえつてお愛嬌である。たとえば、主として米を生産している独立農民をとつてみるがいい。かれは、その生産した米の大部分を

商品として販売し、残りの一部分を飯米として自家消費にあてる。いったい、「自家消費を目的とする部分」をつくらばあいと「商品」として生産するばあいと、そのいづれのばあいがより大きい程度において「使用価値をつくる労働」に「直接興味を持ち得ない」であろうか?! 答は、いわずしてあきらかである。「商品」として生産するばあいの方がはるかに「積極的」であって、むしろ自家用飯米をつくるばあいの方がより「消極的」となるのが、当然である。

右の独立生産者の例は、この論者が、商品生産そのものについて、とりわけ「価値をつくる労働」と「使用価値をつくる労働」との二面性そのものの意義についてどんなに理解するところがすくないか、いや、むしろこれらの意義をまったく歪めてとらえることしかできないか、ということをし、この上もなくよく示している。右の独立生産者は、商品として生産するばあい、できるだけ大きい価値を実現しようとする——だが、だからといって、「価値をつくる労働」そのものに「直接興味をもつ」たり、その「労働」そのものが「積極化」などしてはたまったものではない——が、そのためには、できるだけ多量の使用価値を生産しなければならぬ。価値はこの商品体——使用価値——を離れては存在することはできず、商品体が、つまり生産物量が多量であればあるほど、それに応じて価値総量もますます多額となる。だから、かれは「より大きい価値の実現」を目的としてこれに最大深甚の関心をもつがゆえにこそ、「使用価値をつくる労働」に直接至大の関心をもたざるをえないのである。この点は、その生産者が資本家となつたばあいでもまったく同様である。そしてこのことは、商品を生産する労働の二面性——まさに二面性であって、別々のものではありえない!——の意義を正しく把握すれば、おのづから理解されるところである。ところが、この論者は、この二面性そのものについてまったくまちがったとらえ方をし、これを二重のもの、つまり、ひとつのものの上

にさらに他のものが重なっているだけのものとしか考えることができないのである。そしてこの、二重のもの、つまり、二つのものを重ねあわせたものという考え方が、ほかでもない、二面性とは別にこの論者がことさらかかっている「斯かる二重化」という言葉において、端的に示されているのである。

二 この論者は、「価値をつくる労働が積極的一面となり、使用価値をつくる労働がその消極的一面をなすものとなる」ことを「二重化」と呼び、「具体的に斯かる二重化を可能にする物質的条件をもつくり出すのである」と述べて、すぐこれにつづいて、「労働の機械化、無内容化、量化としての一面は資本主義的生産方法を独自のものとして確立する機械的大工業を基礎にして始めて実現せられるのである」と結んでいる。まず、この最後の文章について、「資本主義的生産方法を独自のものとして確立する機械的大工業」という言葉に注意されたい。「資本主義的生産方法」が「独自のもの」でなければならぬことはすでに周知のところ、その独自の生産方法の最高度に発達を上げたものが機械的大工業であることも論をまたない。ここで「確立する」と云っているのは、マニユファクチュア段階ではまだ資本制的生産は社会的生産において支配的地位を占めるにいたらず、社会的に確立されたとはいえない、ということを示しているものである。それゆえ、この論者の右に引いた言葉そのものが、例によって論理的ならびに国語的錯乱の一本見でしかなくことがよくわかる。「独自のもの」は「資本主義的生産方法」であり、「独自の・資本制的生産方法」は「機械的大工業」であり、「確立」されるのは「資本主義的生産方法」ではなくして、まさに「資本制的生産」もしくは「資本制的生産様式」でなければならない。

そこで、右のような錯乱した言葉を通常の論理的形式におきかえて最後の文章を簡単に書き改めれば、「労働の機械化、無内容化、量化としての一面は機械的大工業を基礎にしてはじめて実現せられる」という文章になり、さきの

「物質的条件」とはほかならぬ「機械的大工業」そのものでなければならぬことがあきらかとなる。それと同時に、この論者が、「労働の機械化、無内容化、量化」という言葉の内容をば「価値をつくる労働の積極化」使用価値をつくる労働の消極化」という論者独自の「方式」に直結させているものだ、ということもおのづから明らかとなる。そこで、この「労働の機械化、無内容化、量化」という、まことに特異な言葉そのものについて、いささか吟味を加えておく必要が生ずる。いったい、これらの言葉は、どんなことを意味しうるものであるか？

まず、「労働化の機械化」とは、いったい、なにか？ このような言葉そのものが、すでに論理的にみてどうてい成り立たないものである。「労働」とは「人間的労働力の流動または支出」にほかならないのであって、この「人間的労働力の流動、支出が機械化される」などということはありえない。これは、おそらく「生産の機械化」という言葉を用意にむりやり「労働」に結びつけてつくりだしたものである。ところで、「生産の機械化」がおこなわれたとて、「使用価値をつくる労働」すなわち「労働の具体的形態」が「直接興味をもたれえない」ものに、「消極的一面」になるということは、けっしてありえない。「機械化」は労働の生産力を高めるためにこそ採用されもし推進されるのであって、そのために特定の使用価値をつくりだす特定の具体的労働の内容をできるだけ簡単にすることが考えられ、機械の主導的作用によってこれを「合理的に」達成するようにはかられる。労働の具体的形態を考慮に入れないでは、「機械化」そのものが、そもそも成り立ちえない。「機械化」によってもたらされるのは、具体的労働の「简单化」にほかならない。

つぎに、「労働の無内容化」という言葉を、「使用価値をつくる労働の消極化」、「無関心化」というさきの言葉とくらべてみられるがいい。いったい、どこに両者の必然的関連があるというのか?! これら両者を結びつけようとする

主張は、「無内容化」という言葉の意味を、その文字そのままに「内容がすべて無くなってしまふ」と解釈し、したがって「労働の具体的形態がまったく意味をもたないものに、もしくは、ほとんど骨抜きになってしまふ」とことだと『理解』したばあいだけに、成り立つことができるようなものである。だが、このような論者にはまことにお気の毒にも、「労働の無内容化」という言葉についての右のような広辞林式解釈は、こと理論の領域においては、もともとまったく通用しないものである。「労働の無内容化」とは、——のちに本稿の「四 資本制的私的所有のもとでの人間的労働」の項において詳論されるように、——「人間的労働力の支出としてその内容がきわめて一面的になること」、とくに「意志力以外の他の精神的諸能力の支出の不要化、したがってまたそれらの自然的流動の抑制」をまさしく意味するものである。それは、「労働の内容がすっかり無くなってしまふ」ことではなくして、「人間的労働力の支出として適当な、均衡のとれた流動ではなく、きわめて一面的な、ゆがめられた簡単なものになる」こと、したがって「人間的労働能力の全面的な発達を阻害し、これを跛行的、一面的にのみ発達させる」ことなのである。つまり、右の言葉は、「人間的労働」の真の内容を正しく把握することなしにはとうてい理解できないものであって、もちろんこういふことは、「使用価値をつくる労働」の「消極化」などという、愚にもつぬ言葉に「直接興味を持つて」ばかりいる論者にはわかりようはずもないのである。さらに、一見してまったく愚劣な創作語であることがわかるのは、「労働の量化」という言葉である。もし、この他愛のない創作語が、かりに、生産者の関心が労働の質的側面すなわち「具体的形態における支出」＝具体的労働にはなくして価値(または交換価値)をどれだけ多く生みだすかという「量的」問題にばかり注がれるということの拙劣な誤った表現だとすれば、このような「量的」問題は、およびよ商品を生産するかぎり、単純商品生産でもマニユファクチュアでもすべて妥当する。それは、「機械的大工業を

基礎としてはじめて実現せられる」ものどころか、とつくの昔からりっぱに実現されているのである。またもし、この「量化」という世にもキテレツな創作語が、「労働の量化」ではなく「生産の量化」ということを意味するものとするならば、これは、たんに生産物が大量に生産されることになったという、資本のもとの社会的労働の生産力の飛躍的増進という法則的事実を一面的に述べただけのものであって、この論者の唱えてやまない「積極化」と「消極化」、つまり「斯かる二重化」などという代物とは、なんらの関係もたないものである。

(18) 第三番目に挙げられた「量化」という奇妙な言葉は別として、「労働の機械化、無内容化」という言葉だけをとってみれば、この論者がこれまで主張しつづけてきた例の「二重化」なるものを言葉の上で合理化しようとして、これらをどこから借りてきたかということは、たやすく推察される。つまり、そのタネは、『資本論』第一卷第十三章「機械と大工業」の第四節「工場」の中のつぎの二つの文章にある。

「……機械労働は神経系統を極度に疲れさせるのであるが、他方ではそれは筋肉の多面的運動を抑圧し、またいっさいの自由な肉体的および精神的活動を不可能ならしめる。労働の軽減さえも責苦の手段となる、というわけは、機械は労働者を労働から解放するのではなく、かれの労働を内容から解放するからである」(インスティトゥット版第一卷、四四四ページ、訳(3)一六八四―六八五ページ、傍点―山本)。

ここで傍点をつけたところをごらんだきたい。「機械労働」は「労働の機械化」につくりかえられ、「労働の内容から解放」は「労働の無内容化」につくりかえられている。もちろん、国語的にみてすらも、「機械労働」と「労働の機械化」とはまったく別物であり、「労働の内容から解放」が「労働の無内容化」とはまったく異なるものであることは、あきらかである。このように、自説の御都合しだいで勝手に切りとって借用するときには——つまり、ひようせつするときには——その本来の正しい意味をすっかりねじまけてしまうことにならずなるものだという、法則的事実がここにははっきりと示されている。だが、このような法則的事実は、つぎの例においても動かしがたく貫徹しているのである。

ホ 右の引用文の第一パラグラフにおいて『資本論』第一巻から借用されているものについても、けっして見のがすことのできない問題がふくまれている。この論者は、「資本にとっても、労働者にとっても、如何なる生産に従事するかに関心を持ち得ないものとなって来る」という主張をかかげ、この主張を裏付けるために、「極言すれば、『労働需要の方向の変化に従って、人間労働の一定部分が、或時は、裁縫の形で、又或る時は機織の形で供給せられる』といったものになるのである」(傍点―山本)と説明している。この第一巻からの引用文についてのこのような説明は、はたして正しいものといえるであろうか？ それがまったく誤りであり、しかも、例によって例のごとき論理的ならびに国語的錯乱と濫用の一典型を示しているものであることは、あきらかである。

マルクスは、第一巻第一章第二節「商品で表示される労働の二重性格」において、まず、使用価値をつくる具体的な労働について簡単な考察を加え、ついで、商品価値をつくる労働の側面に問題をうつし、「価値としては、上衣と亜麻布とは、同等な実体からなる物であり、同等な種類の労働の客観的表現である」(前出、第一巻、四八ページ、訳(1)―一二七ページ、傍点―マルクス)と述べ、この「同等な実体」、「同等な種類の労働」というものの内容を説明するために、これにすぐつづいて、ことさら「しかし、裁縫労働と織物労働とは質的に相異なる労働である」(傍点―マルクス)という文章をあげて、具体的有用的労働はあきらかに相異なる労働であって「同等な実体」とか「同等な種類の労働」とかいったようなものは、一見したところ、存在しないように見えるが、実はそうではないのだ、と、つぎのように述べているのである。

「とはいえ、ある社会状態のもとでは、同じ人間がこもごも裁縫したり機を織ったりしており、かくして、この二つの相異なる労働様式は同じ個人の労働の変化にすぎず、まだ、相異なる個々人の特殊的な固定的職分ではないので

あって、それはあたかも、われわれの裁縫師の今日つくる上衣と明日つくるズボンとが同じ個人的労働の変化を前提するにすぎぬのと、まったく同じことである。さらに、一見すればわかることだが、われわれの資本主義社会では、労働需要の方向が変るにつれて、人間の労働のある与えられた部分が、こもごも、あるいは裁縫労働の形態で、あるいは織物労働の形態で供給される。労働のこの形態変換は摩擦なしにはおこなわれぬかもしれないが、しかしそれはおこなわれなければならない。生産的活動の規定性、したがってまた労働の有用的性格を度外視すれば、それに残るところは、それは人間の労働力の支出だということである。裁縫労働と織物労働とは、質的に相異なる生産的活動だといえ、いずれも人間の脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、かかる意味で、いずれも人間の労働である。それらは、人間の労働力を支出するための二つの相異なる形態にはかならない」(前出、四八―四九ページ、訳(1)―二七ページ、傍点―マルクス、ゴシック体―山本)。

ごらんのように、マルクスは、まず、人間の労働はある特定の具体的形態の労働でなければならず、しかも必要に応じて種々様々の具体的労働がおこなわれねばならぬということを明確に指摘し、これらのさまざまの相異なる具体的労働は、実は「同じ人間の労働」の、「同じ社会的人間の労働」の労働様式の差異にはかならないものであり、したがって同じ「人間の労働力の支出」にはかならないということをし、かくして人間の労働そのものについてその具体的労働および抽象的労働の二面性というものを、あきらかにしているのである。ここに示されているのは、この労働の二面性そのものとのらえ方であり、したがってまた、二面性ということの真の意味はどういうものか、ということである。ところが、あきれたことに、わが論者の例によって例のごとき論理的操作の手にかかると、二面性そのものの意義を明確にしているこのマルクスの文章は、たんにその一面の「使用価値をつくる労働」つまり具体的労働

だけについて述べたものだときれ、しかも、なんと、その「使用価値をつくる労働そのもの」が「消極化」するといふことの説明にすりかえられてしまうのである。

だが、このように『資本論』から引用した文章の意味をまったく別のものにすりかえてしまうという非難にたいしては、この論者は、例によって、「マルクスとのちがいを云々されても納得できない。その引用した文章そのものについて、自分がこれを援用したことの誤りを、つまり、引用したものとしてではなく全部自分が書いた文章としたばあいの誤りを、指摘するのだけければ、承服できない」という反駁をこころみる公算も大いにありうることである。そこで、『資本論』の中でマルクスがこれに与えている意味、内容からまったくきり離して、これとは無関係に、この引用された文章そのものの意味について吟味を加えておく必要がある。そのばあいに決定的な意義をもってくるのは、いうまでもなく、「労働需要の方向にしたがって」という言葉である。そもそも、この「労働需要の方向」という言葉の中の「労働」とは、「使用価値をつくりだす労働」、つまりある特定の具体的労働をおこなうものとしての労働であるのか、それとも特定の「使用価値をつくりだす労働」とはかかわりのない労働、つまり「価値をつくりだす労働」＝「抽象的労働」を指しているものであるか？　それがまさに特定の具体的労働をおこなうものとしての労働にたいする需要にほかならないことは、——ことさら、そこに明示されている「裁縫労働」とか「織物労働」とかいう言葉を挙げるまでもなく、——あきらかである。このばあい、資本家は、裁縫労働という特定の労働にたいする需要が強いことを知って、その特定の産業部面にこそ資本を投下しようとする。同じく労働者は、この特定の産業部面において裁縫労働の形で労働がおこなわれることに社会的需要があることを知り、この特定の労働をなすべくその部面に投入されることになる。資本にとっては、まず特定の需要を見きわめ、その特定の産業部面で特定の「使用価

値をつくる労働」をおこなうことよってのみ、価値増殖をはかろうとする。だから、「使用価値をつくる労働に直接興味を持ち得ない」どころではなく、むしろ、価値増殖のためにこそつねにこれを念頭におき、最大の関心をはらうていなければならぬ。それゆえ、右の文章は、当の論者の主張するところとはまさに反対のことを論証するものとして意義をもつことになるのである。とりわけ資本にとっては、価値増殖のために直接「使用価値をつくる労働」そのものに至大の関心をよせざるをえないことを明確に指摘しているものが、この論者の手にかかる、まるきりそのあべこべに、つまり「使用価値をつくる労働」そのものに直接興味を持ち得ないことを示しているものになってしまふのである。

これまでの説明によっても、「価値をつくる労働」と「使用価値をつくる労働」、つまり抽象的労働と具体的労働とについて、資本家や労働者の主観的「関心」や「興味」を基準にして、両者のあいだに「積極化」「消極化」という差別をもちこみ、しかも、この両者の差別が単純商品生産においては実現をみないで機械制大工業にもとづく資本主義ではじめて実現されるのだという、宇野氏の主張が、そのはじめから終りまで、事実についてみても論理的にみても、まったく成りたちえないものだということは、寸分のうたがいをいれない。そもそも「積極化」「消極化」などという差別をすること自体、まったくの論理的——というよりは、国語的——遊戯にすぎないのであって、およそ商品生産はつねに「労働の二重性」によってかたく制約されているものであって、ことに価値増殖を決定的な目的および動機とする資本制的生産においては、この「使用価値をつくる労働」がいやおうなしに、客観的に、資本にとって重大な制限となっており、これにたいする——宇野氏のいわゆる——資本家の主観的な「消極性」などは、つねにその客観的、必然的な「積極性」によって強力的に匡正されざるをえないことになっているのである。要するに、右の

ような差別つまり「二重性」を云々するのは、商品生産における労働の二面性、とくにそれが資本制的生産において有する重大な意義について、まったく混乱した理解しかもっていないことを端的に示すものといふべきなのである。

ところが、この論者は、労働について右のような「二重性」——「積極性」と「消極性」——を主張するにとどまらないで、この「二重性」を商品の二要因たる価値と使用価値そのものについても主張しているのである。そこでこの点をつぎにたちいってみよう。

(三)

はじめに、価値と使用価値との「二重性」について、宇野氏が主張しているところを引用し、ついでそれを構成している各文章について、これまでのように簡単な吟味を加えることにしよう。ここに掲げるのは、宇野氏の主著『価値論』の第二章「価値の形態」の冒頭におかれた前文である。

「商品が価値であり、使用価値であるということは、価値と使用価値とを商品の所謂二要因となすものであるが、商品における価値と使用価値とは、決して単純にその二要因をなすものではない。生産物は商品たることなくして使用価値たり得るが、商品は価値たることなくしては使用価値たることも得ないのである。云い換えれば商品は、使用価値たることによって商品となるものではない。したがって商品の二要因としての価値と使用価値とは、最初から前者が積極的面をなし、後者が消極的面をなすものと考えざるを得ない関係にある。しかも此の積極的面をなす価値は、それ自体では独立してあるものでもなく、又現に商品自身の自然的形態の内に認め得るものでもない。消極的面をなす使用価値は、然るにそれ自身独立してもあり得るし、又吾々が商品自身の自然的形態として認め得るところで

ある。かくして商品は、最初から吾々の常識に反したものとして現われて来る。それは使用価値としての生産物に与えられた一形態に過ぎないのに拘わらず、此の形態自身は使用価値たる生産物の属性としてではなく、之が本体をなして、元来生産物の本体をなす使用価値自身をその属性の地位に置くといった関係を展開する。

而も価値は、屢々述べるように、直ちに自らを表現し得るものではない。商品自身は之を外部から見れば、使用価値としてしか見ることは出来ない。云い換えれば商品は元来その所有者にとって商品なのである。之を購買する者にとっては使用価値なのであるが、併し己に所有者にとって商品なる限り、直ちに単なる使用価値となすわけにはゆかない。即ち非所有者にとっても商品として買わなければ之を使用することは出来ないのである。しかし商品所有者の場合と反対に使用価値が主となって、価値がその消極的条件となる。しかも之を第三者的に、何れを主として見ることも出来ないということになると、商品経済の特殊性は、屢々見失われざるを得ない。商品は、之を見る者の立場の如何に関わらずその性質によって動くのであるが、それは決して所有者非所有者の関係を超越して動くものではない。科学的に分析するという場合にも、此の動きに従って之を分析する外はないのである。

商品は、価値であり乍ら使用価値としてしか現われまいということから、商品の価値は当然交換価値として、即ち一商品の価値は他の商品の使用価値によってしか表現せられないということになる。かくして吾々は先づ此の商品の価値の外的表現の分析による外は価値自身の積極的究明に入ることも出来ないのである」(『価値論』、一三九—一四〇ページ)。

ごらんのように、この三つのパラグラフから成っている「価値の形態」論前文はまことに特徴的な論理構造を有しているのであるが、その本体を見究めるために、前例にならって、その各パラグラフについてこれを構成している文

章のひとつひとつについて見ていくことにしよう。

まず、第一パラグラフについて。

① 「商品が価値であり、使用価値であるということは、価値と使用価値とを商品の所謂二要因となすものであるが、商品に於ける価値と使用価値とは、決して単純にその二要因をなすものではない」。

まず、ここで「所謂二要因」という言葉に注意されたい。この「所謂」という文字が使われているところからみれば、この「二要因」という言葉は、宇野氏の創造語ではなく、ほかの著者からの借物であること、したがってその意味する内容は、当の著者の用法にしたがわねばならぬということがわかる。この「二要因」という言葉は、周知のように、『資本論』第一巻第一章「商品」の第一節の表題——「商品の二要因——使用価値と価値(価値の実体、価値の大きさ)」、*Die zwei Faktoren der Ware : Gebrauchswert und Wert (Wertsatzanz, Wertgrosse)*」に用いられているものである。ところで、「商品の二要因」ということは、宇野氏の云うように、「商品が価値であり、使用価値である」ということを意味するものであろうか？なるほど、価値はひとつ、使用価値は他のひとつ、だから両者を合せば二つにはなる。だが、問題は二つにあるのではなくて、商品を商品たらしめる要因 (*Faktor*) にこそある。この要因、ということの内容をば、マルクスは、第一章第一節、第二節において、さらに同じく第一章第三節、第四節および第二章において詳細に展開しているのである。とくにそこで決定的な意義をもっているのは、第二節の内容、すなわち「商品に表示される労働の二重性格」である。だから、たんに「商品が価値であり、使用価値であるということ」では、マルクスのいう「商品の二要因」にはけっしてならないのみならず、ここで注意を要するのは、「商品が価値であり、使用価値である」ということは、価値と使用価値とを商品の所謂二要因となすものである」とい

う、この論者特有の論法である。いったい、「商品の二要因」とは、なにか？ それは、「商品が価値であり、使用価値である」ことである。つまり、右の論法は、まぎれもなく「商品の二要因だから、二要因である」という、典型的なトウトロギーでしかないのである。つきにもう一つの特徴的な論法は、「単純にその二要因をなすものではない」というくだりに示されている。つまり、この論者は、価値と使用価値とが対等に二要因をなすものではなく、「前者が積極的面をなし、後者が消極的面をなすもの」だということに誘導せんがために、「単純に……ではない」と記しているのである。この論者の主張の積極的内容はすぐひきつづいて吟味されるが、この「単純に……ではない」という論法そのものについてみただけでも、この論者が、「商品の二要因」ということの内容を単純に「二つのもの」というようにしか理解できず、したがって「二要因」ということの深い意味内容を感じることができないということがよくわかるのである。そこでつぎに「決して単純に……ではない」理由を見てみよう。

② 「生産物は商品たることなくして使用価値たり得るが、商品は価値たることなくしては使用価値たることも得ないのである。云い換えれば商品は、使用価値たることによって商品となるものではない」。

一見してわかるように、ここではこの論者独自の「武器」である論理的錯乱とすりかえとが、いかにその効果を發揮しているのである。われわれは、その「武器」によって目を眩まされることなく、この論法を吟味する必要がある。

この論者の論法の狡智性は、まず、労働生産物一般についての議論と商品についての議論とをからみあわせ、その「紛糾」に乗じて例の「単純に……ではない」論を強行的におしとおそうとするとところにあらわれている。だから、われわれは、最初に、労働生産物一般と商品とをはっきり区別し、いつたいここでは、なにが、どのように問題とな

っているかということを明確につかんでおかなければならない。

まず、労働生産物は、——商品でないものも、商品であるものも、——一般にすべて使用価値を有する。このことは本論稿の第一章「人間の労働の基本的意味」(本誌第十四卷第四号所載)において詳細に論究したところである。使用価値をもたないもの、いいかえれば使用価値でないものは、労働生産物とはいえないのである。この点からみると、この論者の「生産物は商品たることなくして使用価値たり得る」という文章がきわめて問題あるものだとということがわかる。「使用価値たり得る」のではなくして、まさに、労働生産物は「商品であろうとなかろうと」「使用価値でなければならぬ」のである。このようにまったく誤った「たり得る」などという言葉はこの論者がことさらここにもってきたのは、「生産物は……たり得るが、商品は……たり得ない」というように、語呂を合せ、その調子に乗じて自説にひきいれんがためなのであるが、いかなながら、「生産物」と「商品」とでは、語呂は合せ得るが、その内容は合せ得ないのである。

問題は、生産物ではなくして、まさに商品にある。はたして、「商品は価値たることなくしては使用価値たることも得ないのである」という、この論者の断定は、理論的にみて、はたまた論理的にみて、誤りないものといえるであろうか？

「使用価値と価値」とが「商品の二要因」であることは、いまさらここにくりかえすまでもないことであり、この論者自身もこの前文の冒頭で述べたてているところである。だが、例によって、述べたてることと理解することとはまったく別のことである。そもそも「使用価値と価値」とが「二要因」であるならば、この論者の云う「価値たることなくして」のばあいには、それは、なによりもまず、「商品」ではありえないのだ。だから、「商品は価値たるこ

となくしては」などという、もってまわったような文句そのものが、明白な自家撞着でしかない。こんな文句は、はじめから成り立ちようがないのである。「価値たることなく」しては、「商品」ではありえず、それは、たんなる労働生産物一般にほかならず、したがって、それが労働生産物であるかぎり、さきに指摘したように、使用価値たり「得る」どころではなく、まさに使用価値でなければならぬ。

また、かりに一歩ゆづって、右の文章が、「使用価値と価値」とが「商品の二要因」であることを説明したものにすぎないとするならば、「商品は価値たることなくしては使用価値たり得ない」という右の断定と同様に、「商品は使用価値たることなくしては価値たり得ない」という断定も、まったく同等の正しさを主張しうる権利をもたねばならぬ。しかも、いまさらいうまでもなく、この二つの断定が同じ正当性をもって主張されるところに、「商品の二要因」ということの内容の一端が存するのである。つまり、右のような一方的断定のみを固執して自家撞着的主張をものしうるところに、「二要因」についての重大な誤解がすでにあらわれているのである。

ところが、おどろいたことに、右の一方的断定が、「云い換えれば」という言葉によって、第二の文章と同じ内容のものだとされているのである。この第二の文章、すなわち「商品は、使用価値たることによって商品となるものではない」ということは、いったい、どういうことを意味しているものであるか？ それは、商品が「使用価値と価値」とをその「二要因」としてしているということをきわめて拙劣にいあらわしただけのものである。なぜ、拙劣にというかといえば、労働生産物はなによりもまず「使用価値たること」が必要であり、しかもそれが「商品となる」には「価値たること」が不可欠だからであり、したがって、ただしくは、「商品は、使用価値でなければならぬが、使用価値たることだけによって商品は商品となるものではない」と言わなければならないからである。だが、この論者は

もちろん、この第二の文章をして、たんに「商品の二要因」のくりかえしをおこなわせようとするものではなく、第一の一方的断定をそのまま受けついで同じくこれをくりかえすことを意図したものである。つまり、この第二の文章は、「商品は、使用価値たることによって商品となるものではなく、価値たることによって始めて商品となるものである」というように、「使用価値」にたいする「価値」の「決定的優位」をくりかえし主張しているものである。その論拠となっているのは、いうまでもなく、右の第一の文章——「まずもって価値たることなくしては使用価値たり得ない」——である。つまり、はじめから「商品の二要因」についての独断的曲解があり、これにもとづく一方的断定が、たんに「云い換えれば」という言葉でくりかえされているだけのことなのである。それゆえ、第一の文章に「使用価値たることなくして価値たることを得ない」という文句を書き加えるときには、——そしてこれが「二要因」ということをもつともよくまた正しく表現するものだが——この第二の文章も、「使用価値たることだけによって商品となるものではない」ということに正しくかつ厳密に書き改められることになり、要するに「商品の二要因」のたんなる説明ということに帰着することになるのである。だが、「二要因」についての独断的曲解にもとづいてことさらに一方的断定をくりかえしている論者である。是が非でも「使用価値」にたいする価値の「決定的優位」をおしとおさねばならぬ。それがつぎの「したがって」にはじまる文章となる。

③ 「したがって商品の二要因としての価値と使用価値とは、最初から前者が積極的面をなし、後者が消極的面をなすものと考えざるを得ない関係にある」。

まず、ここであげられている「積極的面」とか「消極的面」とかいう言葉は、いったい、どういう意味をもっているものであろうか？

さきに本節(二)において、「労働の二重性」についてのこの論者の主張を検討したさい、この論者が「使用価値をつくる労働」の「消極化」と「価値をつくる労働」の「積極化」なるものを、「資本や労働者や、生産者」の直接の「關心」、「興味」を基準にして主張していたことは、未だわれわれの記憶にあたらしい。つまり、ここでは、商品そのものではなくして商品を生産する当事者たる人間のこの商品にたいする主観的關心の度合が「積極的」、「消極的」を決定するものとなっていたのである。だが、ここでは、問題は、商品をめぐる人間の主観的關心などではなく、まさに商品そのものの「二要因」にある。この論者も、ここではっきりと「商品の二要因としての価値と使用価値」と述べている。つまり「商品の二要因」のうち、価値という「要因」は「積極的」な「要因」であり、使用価値という「要因」は「消極的」な「要因」である、と主張しているのである。では、「積極的な要因」というのはどういう性質をもった「要因」であり、「消極的な要因」というのはこれとちがってどういう性質の「要因」であるのか、ということについては、この論者は一言半句の説明も与えていない。おそらく——「したがって」という「前置き」から推せば——②の「価値たることなくしては使用価値たることを得ない」という一方的断定をもつて、その説明に充分と考えているものである。したがって、「商品は価値たることを得ない」という補完的匡正が必要であると同様に、一方的断定に、「商品は使用価値たることを得ない」という補完的匡正が必要であると同様に、「価値が積極的面をなし、使用価値が消極的面をなすもの」という文句には、「と同時に、その反面、使用価値が積極面をなし、価値が消極的面をなすものと考えざるを得ない関係もある」という補完的匡正が必要不可欠のものとなってくる。

要するに、さきの「労働の二重性」のばあいでも同じであるが、「積極的」とか「消極的」とかいうようなアイマ

いな言葉をあやつること自体が無意味であり、当の論者が「二重性」および「二要因」についてきわめて奇怪な曲解しかもちあわしていないことを端的に示すものであると同時に、また右のアイマイな言葉をあやつって当の曲解と、これに結びついた一方的断定とを同時に「合理化」しようとしているものであることがあきらかにうかがわれるのである。

④ 「しかも此の積極的面をなす価値は、それ自体では独立してあるものでもなく、又現に商品自身の自然的形態の内に認め得るものでもない。消極的面をなす使用価値は、然るにそれ自身独立してもあり得るし、又吾々が商品自身の自然的形態として認め得るところである」。

われわれが、マルクスにしたがって、ただしく「労働の二重性」および「商品の二要因」の意味、内容をとらえるならば、「価値がそれ自体では独立してあるものでないこと」、「価値は商品自身の自然的形態の内に認め得るものでもないこと」はいまさら云うまでもないほど、あきらかである。だが、商品の使用価値についてはどうか？ はたして、この論者のいうように、「商品の使用価値は、それ自身独立してもあり得る」ものであるか？ この論者が「商品は価値たることなくしては使用価値たることも得ないのである」という一方的断定をその主軸としていることは、まだわれわれの記憶にあたらしい。だが、右の「それ自身独立しても在り得る」という言葉そのものの正常な国語の意味は、まさに、商品の使用価値が、価値とは無関係に、価値から離れて、つまり「価値たることなくして」それ自身だけでりっぱに存在しうるということ、価値によって制約されることもなく、「価値が積極的面をなし、自分自身が消極的面をなす」などというわずらわしい関係などによってさらさら拘束されることなく、それ自身だけで独力でありっぱに使用価値として存在しうるということである。つまり、この「それ自身独立してもあり得る」

という主張は、さきの「価値たることなくしては使用価値たることも得ない」という一方的断定と、直接に真っ向うから対立するものである！だが、ひるがえって考えれば、この「それ自身独立してあり得る」という主張にしても、「商品の二要因」ということの意味を真っ向うから否定するものであって、このあたりの論理構成はまことに錯乱の極致というのほかないものである。

⑤ 「かくして商品は、最初から吾々の常識に反したものととして現われて来る。それは使用価値としての生産物に与えられた一形態に過ぎないのに拘わらず、此の形態自身は使用価値なる生産物の属性としてではなく、之が本体をなして、元来生産物の本体をなす使用価値自身をその属性の地位に置くといった関係を展開する」。

まず、第一の文章の中の「吾々の常識に反したものととして」という言葉に注目されたい。常識というのは、この資本主義社会での生活ならびに取引実践を通じて社会の成員が身につけるところの、現実にとらわれっぱなしのいわゆる俗物的觀念にほかならない。だから「常識に反したものと」というのは、科学的思惟によって現象の背後にあるところの、現象とはまさに矛盾した形態をとるところの本質を把握したものでなければならぬ。この点からみれば、「最初から吾々の常識に反したものととして現われて来る」などという文章それ自体が、まったくのタワ言であることがあきらかとなる。「最初から」というのは、マルクスのよくつかった *Zunächst* を借りてきたものにちがひなからうが、これはまだ科学的分析以前の段階を示すものであって、「最初から……現われて来る」のは、まさに俗物にとつてお気に入りの皮相な現象形態を指していったものにほかならない。ところが、なんとわが論者の手にかかると、「常識に反したものと」「科学的分析によってのみとらえられうる本質」が「さしあたり直接に現象してくる」のだそうである！この「常識」なるものの「本体」については、まもなくまたお目にかかるはずである。

ところで、右につづく第二の文章においては、「使用価値としての生産物」、「使用価値なる生産物」、「生産物の本体をなす使用価値」という同じ性質の言葉が連続して出てくる。これらの言葉は、ひとつのこらず、労働生産物一般を指して云っているものである。だが、いったい、ここで問題となっているのは、労働生産物一般なのか、それとも商品なのか？ もし、ここで問題となっているのが商品であるならば、以上三つの言葉はひとつ残らず適当なものではなく、むしろまちがったものといわねばならぬ。「商品」は「使用価値としての生産物に与えられた一形態」というのは誤りであつて、正しくは、「商品は、労働生産物に与えられた一つの社会的形態」といわねばならぬ。また、「商品形態自身は使用価値なる生産物の属性として」というのは誤りであつて、ただしくは「商品形態自身は労働生産物の社会的属性として」といわねばならぬ。

ところで、右のように「商品形態」について、それが「労働生産物に与えられた一つの社会的形態」であり、「労働生産物の社会的属性」にはかならないにもかかわらず、そういうものとしてでなく、「吾々の常識に反するものとして」現われて来るといふのであれば、それにつづいて出てくる文章は当然に、「商品形態をとるものこそが労働生産物であり、商品でないものは労働生産物ではない」ということでなければならぬ。ところが、この論者の論理的思考過程は「最初から吾々の常識に反したものであつて、「労働生産物が本体で商品形態がその属性であるのに、その反対に、商品形態が本体をなして使用価値がその属性の地位に置かれる」という、奇想天外の『結論』に落ちつくのである。この『結論』で、まず第一に *Zwischenst* 目につくのは、「使用価値としての生産物」という、例の言葉をばたちまちのうちに「使用価値自身」にすりかえてしまった点である。これはまさに手品師そのけの早業である。第二に目につくのは、「商品形態」自身がいつ、どうして「本体」に成り上り、しかも本家本元の「本体」たる「労働生

産物」——宇野氏のいわゆる「使用価値」をその「属性の地位に置く」力を与えられたか、という点である。この間の経緯について妥当な説明のないかぎり、——また、そういう説明はできようはずもないが、——ここに述べられているのは、要するに純然たるタフ言とすりかえと、そしていまひとつは、マルクスの叙述からのまちがいだらけの剽窃以外のなにものでもない。この剽窃の「本体」を見きわめる「鍵」は、この論者が不用意に真似た「属性」(Attribut)という言葉そのものにある。まず、マルクスの叙述をつぎに挙げてみよう。

「だが先走りしないためには、ここでは、商品形態そのものに関するもう一つの例で充分であろう。もし諸商品がものを云うことができるならば、彼らは云うであろう、——人間は吾々の使用価値に関心をもつかもされない。それは物としての吾々には属しない。ところで、吾々に物的に属するものは、吾々の価値である。諸商品物としての吾々自身の交通がこのことを証明する。吾々はただ、交換価値としてのみ相互に連関しあうのだ、と。いま経済学者が、商品の心情をいかに語りつたえるか聞こう、——『価値(交換価値)は諸物の属性であり、富(使用価値)は人間の属性である。価値はこの意味では必然的に交換を含んでいるが、富はそうではない。』『富(使用価値)は人間の属性であり、価値は諸商品の属性である。ある人またはある共同体は富んでおり、一の真珠またはダイヤモンドは価値あるものである。……一の真珠またはダイヤモンドは、真珠またはダイヤモンドとして価値をもつ』と。従来まだいかなる化学者も、真珠またはダイヤモンドのうちに交換価値を発見した者はない。ところが、批判の深刻さを特に自負する右の化学的実体の経済学的発見者たちは、諸物象の使用価値はそれらのものの物象的諸属性とはかわりがないが、これに反し、それらのものの価値は諸物象としてのそれらのものに属する、ということを見出す。彼らのこうした意見を確証するものは、諸物の使用価値は人間にとっては交換なしに、つまり物と人間との間の直接的な関係に

において・自らを実現するが、諸物の価値はその反対に、ただ交換・すなわち一の社会的な過程・においてのみ自らを実現する、という奇妙な事情である」(『資本論』、インスティトゥット版第一巻、八九ページ、訳(1)―一八九ページ)。

ここに引用したマルクスの叙述とわが論者の⑤の第二の文章とを比較対照すれば、おそらく当面必要ないっさいの事柄がはつきりするであろう。マルクスは、商品の二要因について、その相互の関係を——「商品の属性」か「人間の属性」かという議論に重点をおいて——解明しているのに、わが論者は、「商品形態」と「使用価値」との間の関係だけを問題とし、そのどちらが生産物の「本体」をなして、どちらが他方の「属性」となるかという議論を並べたてている。マルクスにあっては、価値(交換価値)が商品の「化学的実体」(*Substanz*)と呼ばれているのに、わが論者は、「商品形態自身」を「本体」と称している。いったい、それは、なんの「本体」なのであるか? 商品の「本体」か?——さすれば、商品の「本体」は「商品形態自身」であるという、迷文句が生れるであろう。マルクスの科学的分析をまつまでもなく、「使用価値が物象としての商品体に属する」つまりその商品そのものの「属性の地位に置かれてある」ことは、あきらかである。ところが、批判の深刻さを自負するわが論者の独特の論理的分析によれば、「商品形態自身が使用価値の属性として」あるのが「吾々の常識」であり、「使用価値自身が商品の本体の属性の地位に置かれる」のは「吾々の常識に反する」ものである! 要するに、最初の「かくして」という単語および「属性」および「本体」という言葉にはじまって、この⑤を構成するいっさいのものが、すべてすりかえと——剽窃と——錯乱とタワ言以外のなものでもない「といった関係が展開」されているのである。そして、「かくして」という冒頭の単語にもかかわらず、ここでは、「積極的面をなす」価値なるものは、一度もあらわれることなくおしまいとなっているのである。

つぎに、第二バラグラフについて、簡単にみてみよう。

① 「而も価値は、屢々述べるように、直ちに自らを表現し得るものではない。商品自身は之を外部から見れば、使用価値としてしか見ることは出来ない」。

価値は商品に対象化している社会的必要労働時間であり、これが「直ちに自らを表現しえない」ことは、いうまでもない。だが、だからといって、商品は「使用価値としてしか見ることはできない」という『結論』は、けつして出てこない。そこから出てくるのは、「だから、商品の価値は、——直接に自らをではなく——間接に相対的に表現され得るものでなければならず、間接に相対的にのみ表現される」という『結論』でなければならぬ。そもそも右の「商品自身は之を外部から見れば、使用価値としてしか見ることはできない」という文章自体は、正しいものといえようか？それがまったくの誤りであることは、あきらかである。まず、「自身」とか「之を外部から見れば」などという、煙幕的飾り文句は遠慮なくとりはらうがいい。いま問題となっているのはほかならぬ商品であること、商品をその内部から見るなどとうていできたことではなく、またできたとしてもここでは何の役にも立たないことは、いまさらいうまでもないからである。ところで、「使用価値としてしか見ることはできない」ような物が、はたして、商品といえるだろうか？それは、たんなる労働生産物にすぎない。なるほど、「価値」は直接に表現されえない。だが、それは交換価値という形で表現されうるし、また表現されねばならぬ。交換価値をもたないもの、もしくは交換価値をもっていることが皆目わからないような物が、どうして「商品自身」だなどと云えようか？

② 「云い換えれば商品は元來その所有者にとって商品なのである。之を購買する者にとっては使用価値なのであるが、併し己に所有者にとって商品なる限り、直ちに単なる使用価値となすわけにはゆかない。即ち非所有者にとつ

ても商品として買わなければ之を使用することは出来ないのである」。

さきの①について吟味によって、この冒頭の「云い換えれば」という言葉が、まったくのタワ言にすぎないことは、いまさらいうまでもない。ここでまず細かい技巧がこらされているのは、「元来」という言葉である。つまり、これは、商品が生産者の手で生産されたばかりで、まだ市場に持ち出されない時のことを指しているのである。この時には、まだ購買者は問題になっていないのであるから、生産者＝所有者にとって商品だというのは、あつたりまえのである。ところで、その商品は、その購買者にとっては、「使用価値である」か、はたまた「商品」なのであるか？——こういう問題は、ノルマルな論理的ならびに国語的能力をもっている者には、およそ問題となりえないものであるが、わが論者はこれを問題としてとりあげ、しかもおどろいたことに「購買者にとっては使用価値なのである」と述べ立てるのである。これはまったくの誤りである。このことは「購買する者」という言葉がこの上もなくよく示している。「購買者」とは、その商品を商品として購買し、購買したのちにこれを使用価値として消費する者である。それを使用価値として実現するためにはまずもって購買せねばならず、そのためには、その商品を一個の交換価値をもつものとしてのみ見るのが、交換価値をもつものとしてのみとりあつかうことが必要不可欠である。つまり、その商品は、購買者にとっていやおうなしに、使用価値と交換価値とをもつものであり、またそうものとならねばならぬ。いいかえれば、それは購買者にとって商品であり、商品以外の何物でもないということである。

③ 「しかし商品所有者の場合と反対に使用価値が主となって、価値がその消極的条件となる」。

われわれは、ここでようやく本節(二)でとりあげた「主観的関心の度合」なるものに再会する機会をもったようである。つまり、この③で述べられているのは、商品の二要因たる「価値と使用価値」とについて、商品販売者と商品購

買者とでは、その「主観的関心や興味」の置き方、度合がちがうということ、商品販売者にはその使用価値は「関心や興味」はうすく、価値に最大の関心をよせるが、購買者にとってはそれは「使用価値なのである」から、「使用価値が関心の主たる的となって、価値には興味や関心をもちえない、つまり価値が消極的面となる」というわけである。こういう、例によって例のごとき一方的断定には、日常の取引実践そのものが徹底的反駁を加えている。購買者にとつてたとえどんなにその商品の「使用価値が主となって」いようと、かれはそれを使用価値として実現せんがためにはまずもってこれを購買せねばならぬ。商品使用者ではなくまず商品購買者としてかれはその商品の交換価値（価値）をできるだけ引下げるべく最大の関心を払わざるをえない。つまり、購買者としては、徹頭徹尾、商品の価値が「積極的面」をなすのである。この論者が、商品購買者としての立場をはっきりとらえることができず、これを商品消費者の立場と混同していることは、うたがいをいれない。商品売買における商品価値の「積極化」をうすうす感じてゐるからでもあろうが、ここで、「価値がその消極的条件となる」などと、ことさら、「消極的」に「条件」という文字を附けているのは、まことに手のこんだごまかしといわなければならない。いったい、「その条件」というときの「その」とは、なんのことか？ また、「条件」ということは、「制約するもの」ということであつて、そこに「積極的」とか「消極的」とかの区別はどうしてつけられるというのか？ 購買者は「使用価値が主だが、当面価値を考慮にいれなければ使用価値としてこれを実現できない」という事情をいささか考慮したからこそ、ここに折衷的な——ただしくは、ゴマカシ的な——「条件」という特別の文字があしらわれることになつたものなのである。

④ 「しかも之を第三者的に、何れを主として見ることも出来ないということになると、商品経済の特殊性は、屢々見失われざるを得ない」。

この文章は、その言々句々、ひとつとしてこの論者の論説の精華ならざるはなし、である。その独特の意味を玩味してみよう。

「しかも」——前文とはさらさら関係のないことをいうときにこそ、これは用いられるべきである。しかも之は正しい、という具合に。

「第三者的に」——商品販売者が第一者、商品購買者が第二者、そのほか立場をとりうる者としては第三者以外にはありえない。「社会的に見る」などということは、とんでもないことである。

「何れを主として見ることも出来ないということになると」——つまり、売手は価値を主として考えようとするかどうかでも儲けの多い使用価値のことをまず第一に考えねばならず、買手は使用価値を主として考えようとするかどうかでもそれを安く買うために価値を主として考えざるをえないということになるのであるが、そういう商品売買の実情を認識すると、ということである。

「商品経済の特殊性」——つまり、商品経済の実情を認識しえない論法の特殊性、「商品の二要因」を完全に歪めてしまう特殊な考え方、ということである。

「屢々見失われざるを得ない」——右のような特異な思考方法によっては必然的に見失われるというのが客観的法的であるが、この「……ざるを得ない」のがつねにはなくて、「しばしば」であり、「しばしば」は「見失わないところもある」というように、余裕を残してあるところが、お愛嬌である。

商品は、これを個人的立場からではなく、社会的見地から、「価値と使用価値とどちらが主であるか」などという個人的な主観的関心の度合などを問題とすることなく、「価値と使用価値」とをただしく「商品の二要因」としてと

らえ、その相互の関連をその全体的な広がり^①と深さにおいて追究するときに、はじめて商品形態の独自性したがってまた商品経済の特殊性がたたく把握される。この場合決定的な意義をもつものは、私的所有（と社会的分業）という基本的生産関係であって、商品取引当事者の主観的関心の度合などを問題としているかぎり、商品経済のイロハすら——屢々どころではなく——必然的に見失われざるをえない。このようにしてみると、右の④がいかに国語的ならびに論理的錯乱と理論的歪曲との精華を示したものであるかは、もはやくりかえすまでもないであろう。

⑤ 「商品は、之を見る者の立場の如何に関わらずその性質によって動くのであるが、それは決して所有者非所有者の関係を超越して動くものではない。科学的に分析するという場合にも、此の動きに従って之を分析する外はないのである」。

ごらんのように、ここでの論法もまたきわめて特異なものである。まず、「所有者非所有者の関係を超越して動くものではない」という、樗牛まがいの文句を賞味されたい。そもそも「超越して」どういう動きができるというのか!? だが、「超越しないで、動く」ということは、けっして「何れかを主として見る」という「見る者の立場にしたがって動く」ということではけっしてない。「此の動きに従って」とこの論者が云うばあい「此の動き」とは、いったい、「見る者の立場の如何に関わらずその性質によって動く」ことであるのか、それとも、「所有者非所有者の関係を超越しないで動く」ことを指して云ったものであるか? このようにアイマイな、しかもそのいづれについても厳密な内容規定を与えない二股的説明をもってして、どこに「科学的に分析する」などということが云える素地があるのか! いったい、商品が「その性質によって動く」とは、どういうことか? それは、私的所有（と社会的分業）という基本的生産関係のもとで労働生産物が商品形態を採り、「商品の二要因」が商品の私的交換を必然なら

しめるといふことである。このように私的所有的もとの「労働の二重性」と「商品の二要因」とをその全体的な関連においてとらえることが、とりもなおさず「科学的に分析する」ということである。商品交換の当事者をば、まったくまちがった「所有者非所有者」などという言葉でおきかえてみたり、その「関係を超越しないで動く」ことなど考えてその「動きに従って分析する」ことしか考えられないようでは、「科学的分析」どころのさわぎではなく、粗雑な俗物的観念のごちゃまぜでお茶をにごすのが関の山、ということに屢々ならざるをえないのである。

(19) 商品および商品交換を理論的に考察するばあい、交換当事者を「所有者非所有者」としてとらえることは、まったく誤りであり、またその論者が商品の本質について正しい理解をもちあわしていないことの証左でもある。たとえば、現物地代の取得者たる地主もりっぱに商品所有者であるが、この所有者という範疇では、「労働の二重性」はまったくとらえることが不可能である。ことにこっけい奇抜なのは、「非所有者」という、この論者の創作語である。いったい、何も所有していない「非所有者」が、どうして商品交換の当事者となりうるだろうか？ この点からみても、この論者の商品交換についての科学的分析の欲如は明白である。

最後に、第三パラグラフについて。

① 「商品は、価値であり乍ら使用価値としてしか現われれないということから、商品の価値は当然交換価値として、即ち一商品の価値は他の商品の使用価値によってしか表現せられないということになる」。

「価値であり乍ら使用価値としてしか現われれない」というのは、第二パラグラフの①の「商品自身は之を外部から見れば、使用価値としてしか見ることは出来ない」という、完全にまちがった文章をうけついで云ったもので、同じくまったくのタワ言であることに変わりはない。だが、ここでのヤマは、なんといっても、「一商品の使用価値」を「他の商品の使用価値」にすりかえる美事な筆さばきである。「商品自身は、使用価値としてしか現われれない」とい

うときの「使用価値」は、いうまでもなく、当の商品の使用価値つまり商品体である。だが、商品が「之を外部から見れば、使用価値、つまり特定の物象的諸属性を具えた商品体としてしか見ることができない」ということと、その「商品の価値が他の商品の使用価値によってしか表現せられない」ということと、いったい、どういう関係があるというのか？ いわんや、前者を根拠として後者をそれからの「当然の帰結」として主張することなど、どうしてできようか？ ここで両者に共通な言葉は、わずかに「しか」と「使用価値」との二つだけである。この「しか」と「使用価値」とで、右のような主張をでっちあげているという事実から、当然、この論者の国語的および論理的能力が正常の水準をはるかに超越しているということが実証せられることになる。こういう貧弱きわまるすりかえによってしか価値表現の説明ができないということから、当然、この論者が私的所有という基本的生産関係について、そのもとでの「労働の二重性」と「商品の二要因」の意義について、つまり、商品についての科学的分析のいっさいについて、なにひとつ理解するところがないという事実しか実証せられないということになるのである。

② 「かくして吾々は先づ此の商品の価値の外的表現の分析による外は価値自身の積極的究明に入ることも出来ないのである」。

これはまた、おどろきいった論理的飛躍である。①では「その商品の使用価値」を「他の商品の使用価値」にすりかえてまふまふと「他の商品の使用価値による価値の表現」にまでこぎつけたものである。だが、このことから、どうして、「商品の価値の究明」は「この価値の外的表現の分析による以外に」おこなわれえないということがひきだされるのか？！ そもそも「価値とはなにか？」ということがわからなくて、どうして、「価値の外的表現」などが問題となりえようか？ この論者の唯一の常套手段である国語的ならびに論理的錯乱とすりかえは、この最後のしめくく

りにおいて、論理的大飛躍と、当然の順序を逆さまにするという、高等技術とを加えて、さらに一段と光彩を放っているという次第である。

×

×

×

×

さて、以上本節では、労働の二面性について、それが商品生産において「商品の二要因」たる使用価値と価値とをつくりだすものだということを簡単にみてきたにすぎない。右の「労働の二面性」のうち、抽象的労働が価値を形成することについては、さらに一段とたचितた考察を必要とする。本節につづく三つの節——(4)、(5)および(6)——の内容は、直接にこの考察に結びついているものである。